一般社団法人日本医療薬学会　第69回公開シンポジウム「医療経済と薬剤師」
開催報告書

奥羽大学薬学部　教授　中川直人

平成30年8月11日（土）に、福島県郡山駅前にあるビッグアイ7階市民交流プラザにおいて、首記のシンポジウムを開催しました。県外から参加いただいた先生方もおられ、厚く御礼申し上げます。

基調講演として、東京大学大学院薬学系研究科の五十嵐中先生をお招きし、「薬剤経済学と薬剤師～「対岸の火事」を超えて～」についてご講演いただきました。諸外国の医療経済・薬剤経済の現在についてお話しいただき、日本でも費用対効果に関する研究を進めていく必要性を改めて認識することができました。

シンポジウムの内容は、就実大学薬学部の田坂祐一先生「薬剤師による薬学的介入から得られる医療経済効果の推算」、東邦大学医療センター大森病院薬剤部の山西由里子先生「臨床薬剤師からみた薬剤経済学」、山形大学医学部附属病院薬剤部の志田敏宏先生「薬剤経済分析による分子標的薬の最適な治療戦略」とし、各先生方の研究成果を共有させていただきました。

田坂先生からは、愛媛県では愛媛県プレアボイドシステム（県内の全施設の保険薬局および病院の取り組みが参照可能）を構築されており、そのデータを用いて薬剤師による医療経済効果を推算したという研究成果をお話しいただきました。薬局薬剤師・病院薬剤師の区別なく、薬剤師の薬学的介入の医療経済的なインパクトは大きいことがわかりました。

山西先生からは、「がん化学療法における5-HT_3受容体拮抗剤の薬剤経済学的検討」および「過活動膀胱に対するミラベクロンの医薬品経済評価」についてお話しいただきました。薬剤経済研究の手法を具体的にお示しいただき、初学者にとっても理解しやすい内容でした。

志田先生からは、自施設のレセプトデータを用いて抗がん薬（分子標的薬）の薬剤経済分析の成果をお話しいただきました。研究成果を自施設内でも共有されており、先進的な取り組みをされていることがわかりました。

日本の医療財政がひっ迫している昨今、国策として後発医薬品の導入が推進されていますが、高価な医薬品の登場により、医療費高騰に歯止めがかからないとも言われています。薬剤師が介入することで得られる医療経済学的効果を社会的にも認識してもらう必要性があると同時に、薬剤師による薬剤経済研究が増え、費用対効果の高い薬物治療を提案できるエビデンスが構築されることを願っています。